

米国のedTPAの取組についての論議に関する研究

－養成と採用と研修でパフォーマンス評価を用いる可能性の検討－

小柳和喜雄

(奈良教育大学 教職開発講座 (教職大学院))

A Study on the Discourse regarding to edTPA in USA

－ Focus on Performance Assessment in Certification, Licensure and Professional Development －

Wakio OYANAGI

(School of Professional Development in Education, Nara University of Education)

要旨: 本研究では、養成と採用の緊密な連動にパフォーマンス評価が用いられてきている米国の取り組みに目を向けている。米国では、2013年より、CertificationとLicensureの取得に共通するパフォーマンス・アセスメント(edTPA)を用いる取組が進められている。しかしこのedTPAには、その運用に関わって賛否の論議がある。本研究では、このedTPAの論議の地図を作成することで、米国で進められているパフォーマンス評価の運用方法についてより詳細に検討している。そして現在生じている問題点にも目を向け、教員養成でパフォーマンス評価を用いる際に何に留意して、その可能性を引き出し運用していく必要があるか、論議から見えてきている課題を明らかにしている。結果として、例えば、カリフォルニア州で蓄積されてきた教員のパフォーマンス評価(PACT)の経過の説明とその効果から、妥当性と信頼性があることを根拠にedTPAを用いることの合理性を主張する論調があった。しかし一方で、edTPAが持ちうる問題性の指摘として、パフォーマンス評価を用いながら一般化された教育の方法の取得評価に目が向き、説明がつきにくい判断を要される場面での対応行動に評価の目が向けられていないこと。edTPAを受講している学生の行動や意識を見ると、ポイントを稼ぐこと、ポートフォリオを単純に埋めている傾向が見られること、などが明らかになった。

キーワード: 教員養成 Preservice Teacher Education
パフォーマンス評価 Performance Assessment
edTPA Educational Teacher Performance Assessment
Identity アイデンティティ

1. 研究の背景

世界的なニュースとして移民問題が取り上げられ、中東やアフリカからヨーロッパを目指す人々が、ハンガリーを移動している放送が流れていた2015年、その年の8月ヨーロッパ教育学会(European Educational Research Association)の年次大会がブタペストで開催された。その際、キーノートの1つとしてCochran-Smithによる講演がなされた。ここでは、世界的な教育の潮流として次のような転換(Turn)が起こってきたことが述べられていた。

1つ目は、政策への関心の転換(The policy turn)である。世界が知識エコノミーへシフトして行く中で、今後の世界で求められるニーズに対応していくことに、教育はどのような貢献ができるか論議されてきた。ここでは、学校改善に効果をもたらすのは「政策」であるという考え方が強く出されてきたこと。さらに言えばネオリベラルの影響を受けた政策主導の主張が強く出されてきたこと。

2つ目は、説明責任の関心の転換(The accountability turn)である。教えることや教師教育においては、アウトカムの教育の説明責任がもとめられ、そのためには、

新しいスタンダードが必要であるとされたこと。そして教えられたことがどのように学習者に理解されたかその評価(Input measure)をするだけでなく、それによってその学習者は何ができるようになったのか(Output measure)を評価することへ関心が向けられてきたこと。

3つ目は、実践への関心の転換(The practice turn)である。教員養成のプログラムが実際に採用後の学校で機能していないことが指摘され、実践の中で養成を行う考え方へ関心が大きくシフトされてきたこと(on the job training)。しかし同じ実践(Practice)という言葉を使っても、すぐに役立つ操作的なスキルを身につけさせることへ関心を向けている場合もあれば、学校実践の中で全体的な取組に触れる中でその学校文化や教員文化を学ばせていくといったことへ関心を向けている場合もあった。つまりそれぞれ異なる実践の視点で論議が行われてきたこと。このように養成における実践への関心が強くなっているが、理論と実践の往還を目指すことは容易でないこと。

4つ目は、上記1つ目と3つ目と関連するが、大学やそこで行われている研究に対する関心の転換(The university/ research turn)である。教師教育における大学の役割が周辺に追いやられ、その中で大学の研究や養成

の重要性や信頼性が揺らいできたこと。

最後に5つ目は、平等の関心の転換 (The equity turn) である。教育の機会均等 (教育へのアクセスの平等) から、学習活動が営まれるその学校の教師の質を問題にすることやスタンダードへの到達保証を指摘することへ、つまり説明責任だけでなく結果責任が問われてきたこと。言い換えれば、何を持って平等か (教育機会の平等か、結果の平等か) が問われてきた。しかし一方で、そこで保証を試みている教師の質やスタンダードへの学習者の到達は、ある考え方に基づく姿へ近づく平等性を前提としており、不平等を再生産する構造を温存している問題性がそこにあることも論議されてきた。

以上のような転換 (Turn) が、ここ4半世紀くらいの間に生じ、論議されてきたことが述べられていた。

振り返れば、多くの国々で、確かにこの20数年くらいの間に、教師の専門性を培う取組として、1)授業力などに関するスタンダードを明確にする取組、2)養成の質を高めるため、教育実習を担う学校と養成を行う大学などのパートナーシップの洗練化を図る取組、3)養成プログラムから初任者研修への橋渡し、その後の現職研修との関連などキャリアラダーを明確にした取組、4)継続的に専門性を伸ばしていくための手立てとして教師の仕事とその役割の中に自主的な「学び」を埋め込む取組、それを証明する各種認証制度を連動させる取組、5)専門性を広く磨いていくためのアプローチとして、学校間、地区などによる組織的な取組が、行われてきた。

日本の教員養成を担う大学でも、確かに同様に上記のような取組に関心が向けられ、この10数年間ほどは様々な実践が行われてきた。例えば、養成プログラム内で培われる力を教員側と学生側の両方に俯瞰させたりつなげさせたりするために、カリキュラムマップの作成や評価指標を策定する。それらを用いて自己評価させたり、他者評価をし

たりする試みを推進してきた (スタンダードの策定や教職実践演習の遂行)。また評価の道具としてルーブリックやポートフォリオを用いたパフォーマンス評価等が工夫されてきた (表1)。

平成27年12月21日には、「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コ

ミュニティの構築に向けて～ (答申) (中教審第184号)」、「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について (答申) (中教審第185号)」、「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について (答申) (中教審186号)」と3つの答申が同時に出され、「養成」「研修」を貫く学び合うコミュニティの重要性、教員育成指標の策定を推進する動き、「学校チーム力向上」に向けた取組、「学校と地域の連携」などの重要性に対する言及がより明確化されてきている。

現在、日本では養成は大学、採用と研修は教育委員会がそれぞれその責任を担い、教員志望学生の成績等評価情報の共有や採用に向けて大学と教育委員会で合意した共通基準の活用、また採用後の現職教員の研修受講情報などは関連づけられていない。

しかし、上記答申などに記されているように、地域の養成機関と自治体による教員育成指標の策定とその運用が推進される中で (養成と採用と研修の関係が問われる中で)、この先のことを考えた場合、その取り組みが持ちうる可能性と共に、生じる課題も見つめていくことが重要と考えられる。

そこで本研究では、2013年より養成と採用の緊密な連動を国規模 (34州以上が参加) で進めてきている米国の取り組みに目を向けた。そこで論議されている内容から、スタンダードを明確にし、パフォーマンス評価を用いていく取組についてどのような可能性と問題点があるのか、運用を通じて見えてきた事象、それを生み出す問題構造などを明らかにしていくことに関心を向けることにした。

2. 目的と方法

本研究では、養成と採用と研修でパフォーマンス評価が実際に運用されている米国の取り組みに目を向け、そこで

表1 教員養成や現職研修と関わる日本の教育政策の動き

年	事項 (日本の教師教育改革と関わる様々な論議)
2001年	文科省: 国立の教員養成系大学・学部在り方に関する懇談会報告「今後の国立の教員養成系大学・学部在り方について」地理的ブロック別の教育大学・教育学部の再編を提言 日本教育大学協会「教員養成の「モデルコアカリキュラム」の検討」
2003年	奈良教育大学カリキュラムフレームワークの策定、鳴門教育大学「教育実践学を中核とする教員養成コア・カリキュラム (鳴門プラン) 着手
2004年	文科大臣、教員養成のための専門職大学院を提言
2005年	文科省、教員養成系学部入学定員抑制方針の撤廃 上越教育大学「教育実習を中核としたカリキュラム改革」、横浜スタンダード、一福島大学、島根大学、兵庫教育大学ほか、スタンダード開発へ
2006年	中央教育審議会答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」 教職大学院制度の創設などを提言
2007年	日本学術会議要望「これからの教師の科学的教養と教員養成の在り方について」教員養成を学部レベルの教育から大学院レベルの教育に移行する改革の実施を提言
2008年	教職大学院開設 (全国19大学: 国立15, 私立4) 免許更新制の試行開始
2009年	免許更新制スタート
2010年	教職実践演習該当学生が入学 中央教育審議会 教員の資質能力向上 特別部会スタートー基本制度ワーキンググループ報告 (2012)
2015年	「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」、「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」、「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について」ー教員育成指標の策定推進

論議されている内容を明らかにする。なぜなら先にも述べたが、地域の養成機関と自治体による教員育成指標の策定とその運用が日本でも進められ、養成と採用と研修の緊密な連携が言われると、その評価指標や道具、その運用方法の実際、そしてそこで生じうる可能性と課題などの予見が問われてくると考えられるからである。仮に教員養成や研修を貫く指標（スタンダード）の設定やそれに即してパフォーマンス評価を用いる取組が進められた場合、期待される成果は得られるのか、むしろそこには課題が存在し、それを誘発する問題構造が存在していないのか。その点を明らかにしていくことは重要と考えられるからである。

研究対象としては、米国の TPA (Teaching Performance Assessment) や edTPA (Educational Teacher Performance Assessment) に関わる論議の内容である。

研究方法（手続き）としては、世界で研究論文などに関わるデータベースとして定評のある EBSCO Discovery Service で、edTPA をキーワードに、ピアレビューされている論文を検索し（128 件）、そのうち、アブストラクトから edTPA と関わりがないモノ、また雑誌の冒頭の編集者の声に関するモノとして少し触れている程度のモノなど 36 を除き 92 件を分析対象と抽出した。しかし 2012 年以前の文献がデータベースに出てこなかったため、再調査を行い、TPA をキーワードに、ピアレビューされている論文を探し、そこから 15 件見だし計 107 件を分析対象とすることとした（2016 年 7 月現在末まで）。

まず米国の教師教育における edTPA の位置を明確にするように努め、次に年代における論文数から論議の動向を把握した。そして各論文の内容をキーワードで分類整理し、edTPA の発端を明らかにするように努めた。進める根拠となった PACT の成果から導かれた内容について記載されている論文を取り上げ、PACT から edTPA への経過の流れを追うようにした。また実際に edTPA 試行開始後の論議の特徴を見るために年代ごとの発表論文の内容をキーワードで要約した表を作成し、論議の分類軸を明らかにするように努め、その論点内容を視覚化するように努めた。最後に、現在生じている問題点にも目を向け、教員養成でパフォーマンス評価を用いる際に何に留意して、その可能性を引き出し運用していく必要があるか、論議から見えてきている課題を明らかにするように努めた。

なお、先行研究に対する本研究の位置づけとしては、国内で、米国の edTPA を取り上げている研究（小柳 2015、長谷川、黒田 2015、小柳 2016a）はまだきわめて希少であり、また国際的な研究でも 2013 年から始まった edTPA の研究レビューは、EBSCO Discovery Service のデータベースを見る限り、まだ希な状況から、本関連研究分野の萌芽的研究として、意義があると考えられた。

3. 米国の教師教育改革における edTPA の位置

米国では、よく知られているように、教育の機会均等や

学力格差是正、高い教育効果に向けて、The Elementary and Secondary Education Act (ESEA) が 1965 年から施行され、教育の質保証に努めてきた。しかし 1983 年に米国の National Commission から報告された A Nation at Risk によって、米国の教育の危機的状況が明らかにされた。その危機への対応として、A Nation Prepared: Teachers for the 21st Century. The Report of the Task Force on Teaching as a Profession をそのきっかけとして、教員の質保証に目が向けられ、教員の専門性を担保する Standards を明確にし、養成や研修に取り組む姿勢が前面に出てくるようになった。学習者によりよい結果を導くために、統合された教員の知識が重要であることに関心を向ける動きである。例えば、内容さえ知っていれば授業はできる、教えることはできるとする当時の考えに対して、無視されていた教育方法の知識と内容の知識を繋ぐ「教育的 content 知識 (Pedagogical Content Knowledge)」を、教員が身につけることの重要性を指摘した Schulman (1986,1987) の研究に注目が集まったのもその一連の課題意識からであった（小柳 2016b）。

そのため米国の教員養成では、基本的に州の教育委員会による「求められる教員の資質能力」（州を越えて用いられている InTASC standards 等も関わりながら）の要件に対して、養成をおこなう大学などの教育機関がその要件を組み込みながら、研究成果から得られたプログラム構成の知見を生かして信頼できる養成カリキュラムを編成する体制に向かっていった（小柳 2016a）。

図 1 は、国内の学力到達度調査である The National Assessment of Educational Progress (NAEP) や国際的な学力到達度調査である The Programme for International Student Assessment (PISA) などの結果を受けながら、また Trends in International Mathematics and Science Study (TIMSS) の Video Study (1999) の調査結果など参考にしながら、教育の質保証を教員の質保証を通じて進めようとしてきた米国の主な取組の一連の流れを示している。ESEA 1965 の改訂法として、2002 年に No Child Left Behind Act が制定されて以降は、国として進めながらも各州の自治を大切にしてきたこれまでの取組に対して、より州を越えた国レベルの取組に力を結集させていく一連の取組へ舵が切られ始めた。例えば 2000 年代末より準備が進められ、2010 年から広く動き始めた、最近米国の教育論議でよく取り上げられる、子どもたちに身につけさせたい力、学習内容の基準と関わる Common Core State Standards も州を越えた一連の取組として考えられる。

教員の質保証と関わる一連の取組としては、先にも述べたが A Nation Prepared 以後、現職教員の専門性向上に目を向けた National Board for Professional Teaching Standards (NBPTS) や The Interstate Teacher Assessment and Support Consortium (InTASC) などが、研修や養成と関わる認証 (Certification) 基準の策定とその運用への貢献を行ってきた。またその認証を出す教育機

関の質を評価 (Accreditation) する基準の策定と運用評価に責任を持つ National Council for Accreditation of Teacher Education (NCATE) や Teacher Education Accreditation Council (TEAC) が (2013 年以降は両機関が統合し Council for the Accreditation of Educator Preparation (CAEP) を築き)、その責任を果たしてきた。

edTPA の前身と言われる Performance Assessment for California Teachers (PACT) は、上記の教員の質保証に向けた一連の取組と密接な関係を持つカリフォルニア州の取組 (California law SB2042 1998) と位置づけられる。PACT は、The California Commission on Teacher Credentialing が、Educational Testing Service と一般的な教員に求められる知識や力を定めその測定を行うことで資格取得を認めようとした動きに対して、2001 年に 12 の教育機関が連携して、コネチカット州教育省、INTASC、National Board のポートフォリオによるアセスメントモデルを参考にしながら、子ども中心の学習、学習言語への着目、文脈・計画・授業実践・評価・学習場面の省察を、パフォーマンス・アセスメントを通じて養成していく手法を提案した。そしてその手法の信頼性と妥当性を、実践を通じて明らかにしようとしてきたコンソーシアムである。中心チームには、スタンフォード大学のメンバーが関わり、

教科ごとに開発チームを設立し、2002-2004 年にかけてその開発が進められてきた²⁾。

早くから教員の専門知識やスキルに関して何が重要かに関心を向け、スタンダード化によるその共有の重要性を問うてきた、Darling-Hammond は、PACT の取組に関心も向けながら、効果を上げている多くの教師教育プログラムを調べ、教師の成長を支援するコミュニティの重要性を指摘していた (Darling-Hammond et al. 2005)。そのため、教員個人の力量形成に目を向けるだけでなく、その所属する教員集団、学校の成長、その改善に向けた取組の重要性が指摘された。しかしながら、No Child Left Behind の影響の下、目指す役割を果たせる教員に関心が向けられ、それに値する資格の取得や教科の専門性を磨くことが強く言われる動きがあった (The Secretary's Fifth Annual Report on Teacher Quality 2006)。また National Council on Teacher Quality (NCTQ 2013) から、大学による教員養成が十分に機能していないことの指摘がなされる中で、その主張の根拠に問題があるにしても、社会からの声に応える教員養成を進めざるを得ない状況がそこにあった。

そのような中、2013 年より教育的教員パフォーマンス・アセスメント (Educational Teacher Performance Assessment ; edTPA) が動き出した。これは米国政府が

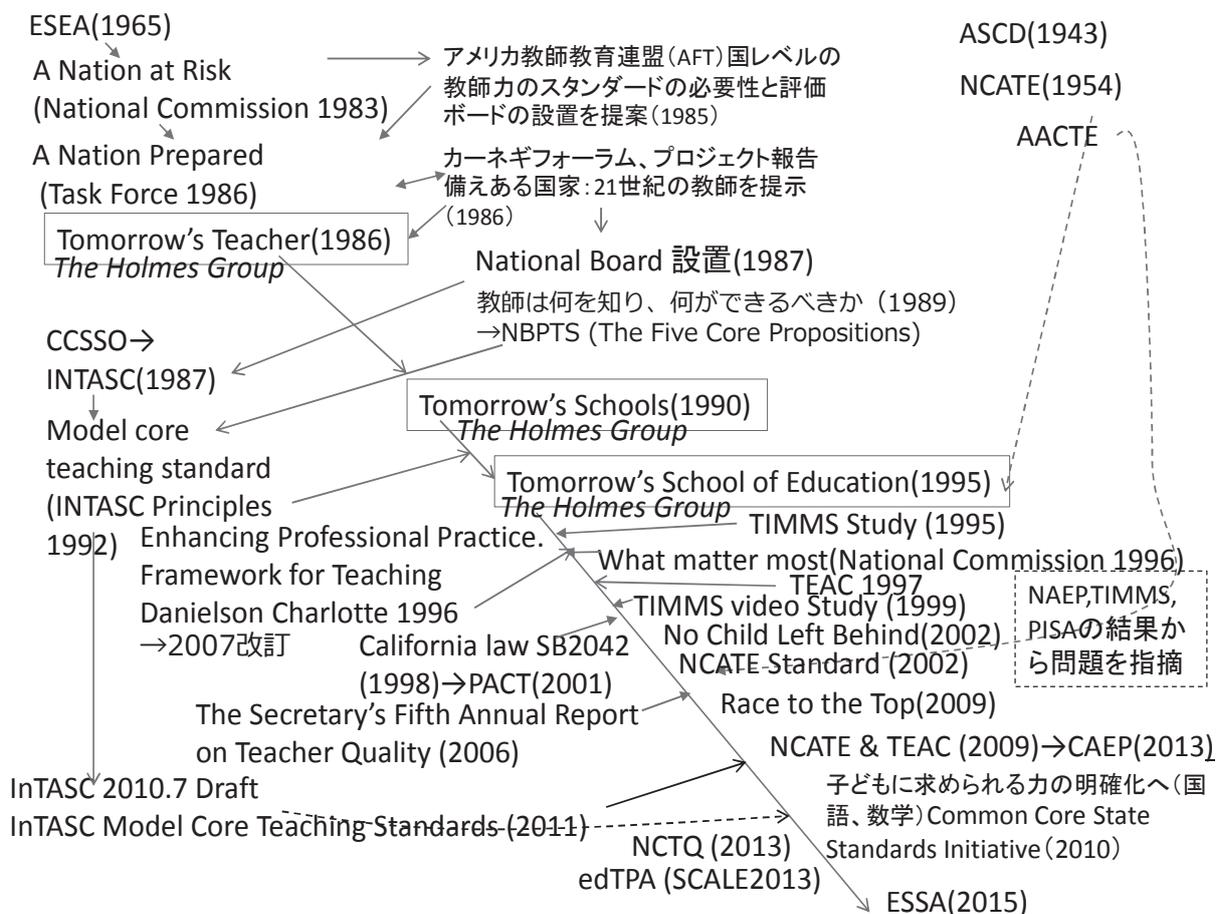


図1 米国における教育の質保証に向けた一連の教員の質保証の取組

行った施策ではない。しかし多くの州等の参画の下、アセスメント、学習、平等のためのスタンフォードセンター（Stanford Center for Assessment, Learning and Equity ; SCALE）が、全米教員養成大学協会（The American Association of Colleges for Teacher Education ; AACTE）とパートナーを組み、開発した教員志望者の授業力等（Teaching Performance Assessment）をアセスメントする評価の枠組やその運用体制（27 の教科や校種対応）である。より具体的に言えば、edTPA は、教員志望者が教室で授業をするためにまず求められる計画・遂行・評価（Planning, Instruction, Assessment）に関する知識や技能や能力を有しているかを測るために web-based のポートフォリオを活用した教員養成の質保証の体制、さらに言えば、全米でのその標準化を志向した教育体制のことを指している³⁾。

SCALE は、全米教職専門職基準委員会（the National Board for Professional Teaching Standards ; NBPTS）や州間教員評価支援協議会（the Interstate Teacher Assessment and Support Consortium ; INTASC）の Standards portfolio、そしてカリフォルニアの教師のためのパフォーマンス・アセスメント（the Performance Assessment for California Teachers ; PACT）など先行した基準に基く質保証の取組から得た知見を集約し、多くの教員や教員養成の教育者、研究者からフィードバック情報を取集しながら、この edTPA の開発を行ってきた。

大学は、edTPA を教員養成プログラムの修了を証明する認証（Certification）として、また自治体（州）としては免許（Licensure）を出す要件として、併せてとらえるところも出てきている。2014 年 4 月の状況で、全米の 34 州と the District of Columbia の 500 以上の教育機関がこの取組を運用、また試行をはじめ、現在も、どのような効果や問題があるか様々な教育機関でその運用評価が進められている。

edTPA が評価しようとする内容で特徴的なことは、子どもの学習活動に、教授行動がどのように寄与しているかを評価する点である。つまり教員としてのパフォーマンスのアセスメントはあくまで子どもの学びの成果を裏付けとして評価されるという点である。それを中心として、1)教科に関する知識、内容基準（Common Core State Standards Initiative）の理解、教科固有の教育方法、2)多様な子どものニーズに関する知識、子どもの（経験や既習）知識の活用、3)どのように子どもが学ぶかに関する研究と理論の理解、4)授業が子どもの学習に効果を持つことを把握する省察力・分析力、を評価しようとしている。また 5)授業で指導する際に重要となる学習言語（Academic Language ; 米語を母国語としない子どもに、各教科の学習内容のキーワードとなっている言葉、授業で学習活動の指示などを出す際の教師の指導言など、教育用語のこと）への感覚やその実際の運用も問おうとしている。

このように多次的な尺度を用いて、教員を目指す学生

のティーチングに関するアセスメントを行うものである。具体的には、教員志望学生は、先の 1) から 5) について共通の評価項目にしたがって、電子ポートフォリオにその達成を示す証拠や解説を提出するものである。電子ポートフォリオは、大手出版社の Pearson がその開発の中心として関わり、その運用もそこを中心に進められている。

教員志望者は、受審料を払い、インターネット上の WWW からまず登録を行い、各評価項目に沿って、自身の所属する教員養成機関での学びの成果や教育実習の成果をそこにアップロードし、解説を書き込む形になっている。これらのデータは、トレーニングを受けたその学生の所属する養成機関のスタッフ、所属する学校区の教員、教育関係者からルーブリックにより判断され、その力の習得が評価される。合格ができない場合は、手続きを経て、再審査を申し出る形となっている。

しかし、この edTPA はまだ始まったばかりの状況で、その信頼性や有効性の根拠や運用に関わっては次のような賛否の論議があった。

4. 関連論文に見る edTPA の成立の経過

この間公表されている edTPA 成立の経過や試行した結果などに関わって、データベースに公表されている論文数へ目を向けると図 2 のような動きがそこに見られた。

2005 年前後の論議は、先に述べたとおりであり、教員の質を上げ、教員養成のプログラム効果をあげるための方法が論議されてきた。Schulman(2005)が、医学や法学などの Professional を育てる教育プログラムに関心を向け、そこにある pedagogy の特徴を Signature pedagogies として取り上げた。これに呼応して、教員養成においてもプログラムの展開方法をあらためて丁寧に検討していくことが考えられ始めたのもこの前後の動きによると考えられる。また、これまでの大学の養成課程等では、その学生の習得状況をテストやスーパーバイザーの観察による判断で評価してきたことに対して、新たな視点の評価の必要性が述べられ(Pecheone, Pigg, Chung, & Souviney, 2005)、プログラムの効果を見るための評価方法への関心が高

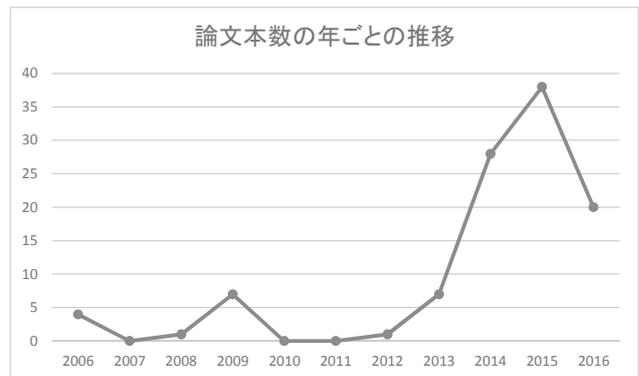


図 2 EBSCO に見える edTPA 関連の論文数の推移

まってきた。例えば Darling-Hammond(2006) が教師教育プログラムの効果を測る方法を多面的に検討したり、Arends (2006)が教師教育でパフォーマンス評価を用いることと関わって、パフォーマンス評価それ自体の歩みなどについて語るなどなされ、TPA(Teacher Performance Assessment, Teaching Performance Assessment)により関心が向けられるようになった。

このような中、先にも触れたが、edTPA に影響を与えたとされる PACT の取組等が、カリフォルニアでの教師教育改革 SB 2042 の動きによって生じ、実際に TPA を用いた取組として動き出した。養成プログラムを提供している大学などの教育機関がどのように SB 2042 の 7 つの目標を解釈し、プログラムの開発を進めていったのが、ケーススタディの結果を用いて報告され始めた (Hafner & Maxie 2006)。また実際に TPA を用いた構造的な実習 (フィールドワーク) が行われる事によって、それが用いられない時とどのように変わったかを述べる報告も現れた (Carlile 2006)。

パフォーマンス評価は、1990 年代から教員養成のプログラム効果を見る上で確かに用いられていた。教師の self-report からその効果を分析する研究、養成中に作成されたポートフォリオなどから効果を分析する研究、パフォーマンス評価を用いる場合と用いない場合の効果比較を分析する研究等が行われてきた。しかし、様々な実習やフィールドワークの中で何がどのようにその効果と関わっているのかなどを丁寧に分析する研究は、十分とは言えなかった。そのため、TPA を用いた取組として、PACT の方法やその効果に関して、事例研究を通じて何がどのようにプログラムとして効果的なのか、その詳細が分析され報告されるようになった (Chung 2008)。

2009 年頃になると、関連する研究が多く出されるようになってきた。The California State University (CSU) が行った TPA を用いた取組から、得られた評価結果が報告され (Guaglianone, Payne, Kinsey, & Chiero, 2009)、カリフォルニアで PACT と同様に認められている the Fresno Assessment of Student Teachers (FAST) はどのようなものかについて解説 (Torgerson, Macy, Beare, & Tanner 2009) も出された。また PACT による取組に関する文献レビュー、取組によって生じた影響や効果を受講した学生のセルフレポート等から分析し、PACT を用いた学校での指導教員の認識がその効果に影響を及ぼしていること、指導教員の学生のポートフォリオなどへのコメントが影響することなどを明らかにする調査結果も出されるに至った (Okhremtchouk, Seiki, Gilliland, Ateh, Wallace, & Kato 2009)。

より焦点化した研究としては、子ども中心の授業を実践する指導力と関わって、実践を省察させるためにビデオを用いることの効果を問う研究 (Gainsburg 2009)、多様な背景を持つ英語学習者が多くなる中で、英語の授業をどのように効果的に進めていくか、書かれたモノ、ビデオ記

録、生徒の学習記録、提出物などを総合的に分析して、教員としての指導力を多角的に評価していく PACT の持ちうる可能性と運用上の留意点などを明らかにした研究 (Bunch, Aguirre & Téllez. 2009)。そして数学における概念理解の指導力を導くプログラム評価をパフォーマンス評価を用いて行った取組 (van Es., & Conroy 2009) なども報告されるようになった。またカリフォルニア州の SB 2042 と SB 1209 (2008 年 7 月より teaching performance assessment の実施について定められた法) の要件を満たしていく養成プログラムの信頼をあげていくために、California Teacher Performance Assessment (CalTPA) と Educational Testing Service (ETS) によって開発された assessment program を用いた取組を定性的、定量的に分析評価し、その持ちうる可能性と運用上の留意点について明らかにする研究も現れた (Riggs, Verdi, & Arlin. 2009)。

そして 2012 年頃になると、養成課程におけるスーパーバイザーの学生の取得状況に対する評価と PACT を用いた学生の実際の姿の評価結果に差があったこと、同じプログラムでも高い効果を出す学生と低い効果しか出さない学生が生じる理由に言及し、大学のスーパーバイザーの役割について問うた研究 (Sandholtz 2012) も出されるに至った。PACT と edTPA の大きな違いとして言われることとして、PACT はパフォーマンス評価それ自体を指導する大学教員 (スーパーバイザー) も関わるが、edTPA の場合は、大学の指導者とは別の複数の資格を持った評価者が評価を行うことがある。このような流れが生じてきたきたのも、PACT と関連する上記の様々な研究知見が影響を与えたのがここからも理解できる。

これ以後、図 2 に見られるように、edTPA と直接関わる研究論議が進むことになった。

5. edTPA の論議の特徴

では、実際に edTPA が試行され、その成果や課題も見え始めてきた 2013 年以降、どのような論議が行われ、そこにどのような特徴があったのか。EBSCO Discovery Service で、edTPA をキーワードに、ピアレビューされている論文を検索し (128 件) そのうち、アブストラクトから edTPA と関わりがない論文、また雑誌の冒頭の編集者の声に関する記事など、少し触れている程度の文献 36 件を除いた 93 件を分析対象とし、そこで取り上げられている edTPA に対する評価コメントを抽出し、何を取り上げ、結果何を主張しようとしているのか、その要旨をキーワードで表した。そしてそれを用いて論議の文脈の整理を試みた (表 2)。

個別に見ていくと、たとえば、普及させていく 1 つの根拠ともなる、edTPA を試行した 7 人のカリフォルニアの代表人物からの調査結果 (Stillman, Anderson, Arellano, Wong, Berta-Avila, Alfaro, & Struthers 2013 表 2 の 1)、

表2 キーワードに見る edTPA 関連の論文の内容傾向

	教師教育の在り方、教師教育者の役割	教職の固有性、専門性の探究
2013	1「edTPA の活用は、実践の変容になるのか、ある場合への適応になるのか」.2「PACT をどのように用いていくか」.3「実践の自己省察の意味」.4「不安から見えてくるモノは」.	5「多文化教育の教員養成」.6「幼年教育」.
2014	7「教員養成改革と edTPA」.8「小学校教員養成改革の歩みと edTPA」.9「養成の新しい方法」.10「アセスメントとアカウントビリティ」.11「高等教育改革とネオリベラル」.12「養成と現職研修のアセスメント」.13「ポートフォリオの重要性」.14「教科、学校種固有の TPA : そのためのインストラクターの養成」.15「学校との効果的なパートナーシップの持ち方」.16「教師の評価は正しいと言えるか」.17「連携協力校の教員の役割」.18「標準化された PA を必要とする理由」.19「PA の要件を用いた授業実践」.20「教師と子どもの相互作用の観察の方法」.21「テクノロジーの活用法」.22「学生を育てるカリキュラム」.23「省察ライティングの意味やその方法の検討」.24「アカデミックランゲージ (学習言語) の指導に関して、教員志望学生はどのように考えたか、指導案を通じた調査結果報告」	25「edTPA を用いた外国語教員の養成」. 26「edTPA を用いる際、英語の教員養成で見落とされていること」.27「CCSS の影響: 美術」.28「音楽の教師の成長」.29「幼児教育における役割」.30「ビジネス教育の教員養成」.31「英語の教育政策とネオリベラル」.32「英語の養成プログラムが授業実践に及ぼす影響」.33「美術教育における教育論議」.34「国際バカロレアへの対応」
2015	35「ニューヨーク州とワシントン州で edTPA が与えた影響; 学生の適応度からの検討」.36「edTPA は教員養成にとって正しい選択肢か」.37「ニューヨーク州で得られた edTPA からの教訓」.38「教員養成で PA を用いる」.39「生徒にフィードバック情報を返す授業が学生に及ぼす影響」.40「edTPA を教室の実践でどのように用いるか」.41「edTPA を活かすための文化作りの意味」.42「自己評価の意味を考える」.43「州の教員評価と教師教育の関係」. 44「授業後の検討会の活かし方」.45「教員組合は edTPA をどのように受けとめているか」.46「リアリティへの誘い」.47「教師教育の改革」.48「ワークショップによる省察ライティングの書き方指導」.49「edTPA による評価方法の問題」.50「PA による学生の学びのエビデンスの活用方法」.51「教員採用の可否への影響要因への言及」.52「メンタリングの方法」.53「学習指導案作成のための指導方法」.54「授業の展開に対する定性的分析方法」.55「メンター・ティーチャー・トレーニング」.56「教育の歩み」.57「実習授業で教室の生徒から得た教訓」.58「教師教育者の立っている位置」.59「教師のアイデンティティ」.60「教師研究の行方」.	61「edTPA を用いた小学校教員養成—社会の授業に目を向けて—」.62「外国語の教員養成で edTPA を用いる際の省察方法」.63「英語の授業方法の指導で edTPA を用いる際の用い方」.64「数学の授業におけるアカデミックランゲージ (学習言語) の指導」.65「社会科の授業で探究的な教員を養成する」.66「学際的なカリキュラム開発へのアプローチ」.67「音楽の教師のためのライセンス」.68「耳が聞こえない生徒の語りの評価」.69「外国語の教え方」.70「理科の教員養成」.71「歴史的思考のための概念」.72「テクノロジーの教育を担う教師の認証として Pearson-Praxis の assessments がどのように意味を持つか、さらなる工夫として何が必要かなど、より精度の高いパフォーマンス評価の方法」.
2016	73「edTPA における学生同士のピアレビューの持つ意義」.74「データから見られる edTPA の合格者の傾向」.75「連携協力校の教員が edTPA に及ぼす影響」.76「PACT と edTPA のパフォーマンスアセスメント」.77「edTPA への教師教育者の関わり」.78「edTPA への Pearson の関わり」.79「説明責任の効果」.80「edTPA が養成プログラムの改善に持つ意味」.81「PACT に対する新任教員の認識」.82「ビデオ記録に対する構造化されたフィードバック情報を提供することの効果」.83「メンタリングに対する省察」.84「現在の学校改革との関係」.85「標準テストでの成績向上とそこで見られる教師の実践の共通点」.86「教師教育改革とネオリベラリズム」.	87「科学と技術の実践における edTPA」.88「特別支援での実践」.89「歴史の授業に対する学生の態度」.90「アセスメント・ルーブリックを確認的因子分析を用いて検証する」.91「カリキュラム改革に対する社会の教員の反応」.92「小学校の算数の授業におけるアカデミックランゲージ (学習言語) の指導」.93「小学校算数における学習言語の指導の効果を評価した報告」

テクノロジーの教育を担う教師の認証として Pearson-Praxis の assessments がどのように意味を持つか、さらなる工夫として何が必要かなど、より精度の高いパフォーマンス評価の方法の検討を行う研究 (Mahoney, 2015 表 2 の 72) など処方的な研究が出てきたのがわかる。

また edTPA で着目しているアカデミックランゲージ (学習言語) の指導に関して、教員志望学生はどのように考えたかを指導案を通じて見た調査結果報告 (Lim, Moseley, Son, & Seelke 2014 表 2 の 24) 、2つの州の 24 人の受講者を通じた edTPA の調査研究 (Meuwissen & Choppin 2015 表 2 の 35)、ニューヨークでの取組を通じて、7つの教訓を明らかにした報告 (Greenblatt & O'Hara 2015 表 2 の 37) 等、行われていることの成果の実態を明らかにしようとする記述的な研究も出されてきたのが読み取れる。

より学校種や教科に焦点化した研究として、edTPA の初等、中等教育の数学における学習言語に目を向けた取組 (Lim, Stallings, & Kim 2015、Castellano, Duckor, Wihardini, Telléz, & Wilson 2016) 表 2 の 64 と 92) やオンラインを用いて edTPA で低いスコアの学生を支援する取組報告 (Falter & Sondergeld 2015 表 2 の 39)、CCSS Initiative の動きとも関わって小学校算数における学習言語の指導の効果を評価した報告 (Castellano, Duckor, Wihardini, Telléz, & Wilson 2016 表 2 の 93) 等がされてきた。

さらに edTPA による自己評価がもたらす意味に関する報告 (Logan 2015 表 2 の 42)、edTPA を活かすための文化作りの意味 (Miller, Carroll, Jancic & Markworth 2015 表 2 の 44)、edTPA がもたらす養成評価、教員の関わり、教員採用の可否への影響要因への言及 (Sandholtz & Shea 2015, Ratner, & Kolman 2016 表 2 の 74)、文献レビューによる論議の整理 (Reagan, Schram, McCurdy, Chang, & Evans 2016 表 2 の 80) など、edTPA がもたらす可能性と共に、どのような点が問題となっているかを論議のポイントを指摘する研究なども報告されてきた。

その特徴全体を論旨の文脈から整理すると、初めの頃 (2013 年頃) はどちらかと言えば、edTPA に対してその可能性や成果を主張する論調とともに懐疑的な論調も見られたが、次第に edTPA の試行によって明らかになってきたことをふまえ、その影響化で、edTPA がもたらすプラス面とマイナス面の姿を、両面から整理する論調が増えてきた傾向が見られた。

また、現在までのところ「教師教育の在り方や教師教育者の役割」と関わって edTPA を取り上げ、論じる内容が多いが、教科等の指導と関わって、「教職の固有性、専門性の探究」に迫っていく内容を論じることも増えてきている傾向が見られた。

6. 得られた知見

以上ここまでの論議の流れから、語られている論点を、教員育成指標の策定やその運用 (養成・採用・研修の緊密な連携) への示唆と関わって整理すると次の点が上げられる。

まず edTPA は、養成プログラムの実質的な効果を上げるために、評価方法を見直し、プログラムの質を高めるように努めてきたカリフォルニアでの教員養成に対するパフォーマンス評価 (PACT) の研究実績と得られた知見を根拠にして作られてきた。その取組の経過とその効果検証の結果から、PACT で用いられたパフォーマンス評価を用いた teaching の評価は妥当性があり、信頼性がある。したがって、その成果に基づく edTPA の手法や体制は、各養成機関や学校の教員に求められる力を outcome measure によって明確化し、教員養成における質の確保に広く可能性をもつという主張である (前史に相当する 2005 年から 2012 年までの論考、表 2 の 1~2、7~10 など 2013 年の論文関係にその傾向が見られる)。

しかし、PACT にしろ edTPA にしろ、実習校やメンター (学校の指導教員) の考え方やそこで何をパフォーマンス評価するかの理解によって、取り上げることができる実践に影響が出る。また実習先の学校で学習している生徒のニーズや背景なども考慮し、学生は 3 から 5 の授業を計画、実施、評価し、そのエビデンスとして 2 から 3 のビデオ映像を切り取るなどしなくてはならない。このような評価方法では、限定した一般化された教育の方法ばかりが取り上げられることになり、他に求められる効果的な教育方法が存在することに対して限定を与え、教育方法を過小評価させてしまう恐れがある。例えば、PACT や edTPA は、授業におけるアカデミックランゲージに大きく関心を向けさせた点は成果である。しかし、基準できめられた限定されたアカデミックランゲージにのみ目を向けると、算数・数学の概念理解の指導や英語の多様な読み方の指導、社会の出来事や事象間の深い理解の指導に制限をもたらす問題性もある (表 2 の 11~19、24~26、61~65、92~93 などにその傾向が見られる)。

また PACT の場合は、実際に養成課程で指導しているスーパーバイザーや学生同士がそのプロセスや評価に関わることができたため、学生はポートフォリオ上にアップした取組情報を共有でき、学び合うことができた。スーパーバイザーはフィードバック情報を与えることもできた。しかし edTPA は、それが結果として edTPA の可否に影響するため公平性や評価の客観性を担保する意図から、外部評価者による edTPA の評価がなされ、スーパーバイザーが評価に関与することは制限される。このようにパフォーマンス評価の用い方は、養成に力を入れるのか、その結果の評価に力を入れるのかによって、異なる結果をもたらす。養成と採用を繋ぐ試みの場合、この点の慎重な対応が求められる (表 2 の 35~43、50~60 などにその傾向が

見られる)。

edTPA は、企業が教育に介入してくる。それによって生じる出来事の想定を十分しているとは言えない (Pearson が電子ポートフォリオの開発と運用に責任を持っていること)。また edTPA を受講している学生の行動や意識を見ると、ポイントを稼ぐこと、ポートフォリオを単純に埋めている傾向が見られる。このように効率的効果的と考え、またよかれと思いつき取組んだことも、養成と採用等の緊密な連携を考えた取組をする場合、別の姿を見せることもあることを考える必要がある (表2の 72~86 など) にその傾向が見られる)。

以上のことが、教員養成や研修を貫く指標の設定やそれに即してパフォーマンス評価を用いる取組が進められた場合、1) 成果を上げる取組の方法、2) 選択が求められる問題構造、3) 運用上の課題、として明らかになった。

謝辞

本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金 (基盤研究 C : 16K01111) 「小中一貫教育校における教員のアイデンティティと専門的能力の明確化及び研修評価研究」からの支援を受けている。また本研究は、2016年10月1日、日本教育方法学会第52回 (九州大学) 大会自由研究 第5分科会で発表し、そこでの質疑を受けて再構成している。

注

- 1) この講演内容は、より整理されて、University of Chicago Press から、Gary Beauchamp et al.(2015) *Teacher Education in Times of Change* 出版された本の Foreword としてまとめられている。
- 2) http://pacttpa.org/_main/上の A Brief Overview of PACT を参照 (2016年7月)
- 3) edTPA に関する情報は、次の URL に集約されている。 <http://edtpa.aacte.org/>

参考文献

- Arends, R. I. (2006). Performance assessment in perspective: History, opportunities, and challenges. In S. Castle and B.S. Shaklee (Eds.), *Assessing teacher performance: Performance-based assessment in teacher education*. Lanham, MD: Rowman & Littlefield Education. p.3-22.
- Bunch, G.C., Aguirre, J.M., & Téllez, K. (2009) Beyond the Scores: Using Candidate Responses on High Stakes Performance Assessment to Inform Teacher Preparation for English Learners. *Issues in Teacher Education*, 18(1), p.103-128.
- Carlile, S. (2006) With Our Feet on the Ground (and in the Classroom): Towards Making State-Mandated Assessment Meaningful. *Issues in Teacher Education*, 15(2) p.21-42.
- Chung, R. R. (2008) Beyond Assessment: Performance Assessments in Teacher Education. *Teacher Education Quarterly*, 35(1), p.7-28.
- Castellano, K. E., Duckor, B., Wihardini, D., Téllez, K., & Wilson, M. (2016) Academic Language in an Elementary Mathematics Teacher Licensure Exam. *Teacher Education Quarterly*, 43(1) p.3-27.
- Darling-Hammond, L., Pacheco, A., Michelli, N., LePage, P., & Hammerness, K. (2005) Implementing Curriculum Renewal in Teacher Education. In Linda Darling-Hammond, & John Bransford (Ed) *Preparing Teachers for a Changing World: What Teachers Should Learn and Be Able to Do*. Jossey-Bass, A Wiley Imprint. p.442-479.
- Darling-Hammond, L. (2006). Assessing teacher education: The usefulness of multiple measures for assessing program outcomes. *Journal of Teacher Education*, 57(2), p.120-138.
- Falter T., A., & Sondergeld, T. (2015) Investigating the Impact of Feedback Instruction: Partnering Preservice Teachers with Middle School Students to Provide Digital, Scaffolded Feedback. *Journal of the Scholarship of Teaching and Learning*, 15(4) p.83-109.
- Gainsburg, J. (2009) Creating Effective Video To Promote Student-Centered Teaching. *Issues in Teacher Education*, 18(1), p.163-178.
- Greenblatt, D., & O'Hara, K. E. (2015) Buyer Beware: Lessons Learned from EdTPA Implementation in New York State. *Teacher Education Quarterly*, 42(2) p.57-67.
- Guaglianone, C. L., Payne, M., Kinsey, G.W., & Chiero, R. (2009) Teaching Performance Assessment: A Comparative Study of Implementation and Impact amongst California State University Campuses. *Issues in Teacher Education*, 18(1) p.129-148.
- Hafner, A. L. & Maxie, A. (2006) Looking at Answers about Reform: Findings from the SB 2042 Implementation Study. *Issues in Teacher Education*, 15(1), p.85-102.
- 長谷川哲也, 黒田友紀 (2015) 米国のスタンダードにもとづく教員養成プログラムとその運用について: パフォーマンス評価の展開と課題 日本教育大学協会研究年報 33, 39-50.
- Lim, W. M., Lauren J., Son, J.-W., & Seelke, J. (2014) A Snapshot of Teacher Candidates' Readiness for Incorporating Academic Language in Lesson Plans.

- Current Issues in Middle Level Education, 19(2) p.1-8.
- Lim, W., Stallings, L., & Kim, D. J. (2015) A Proposed Pedagogical Approach for Preparing Teacher Candidates to Incorporate Academic Language in Mathematics Classrooms. *International Education Studies*, 8(7) p.1-10.
- Logan, B. (2015) Reviewing the Value of Self-Assessments: Do They Matter in the Classroom? *Research in Higher Education Journal*, 29, p.1-11.
- Mahoney, M. P. (2015) Pearson-Praxis Assessments Review Teacher Certification Assessment Technology Education: A Report for the Council on Technology and Engineering Teacher Education. *Journal of Technology Education*, 27 (1) p.78-89.
- Meuwissen, K. W., & Choppin, J. M. (2015) Preservice Teachers' Adaptations to Tensions Associated with the edTPA during Its Early Implementation in New York and Washington States. *Education Policy Analysis Archives*, 23(103).p.1-24.
- Miller, M., Carroll, D., Jancic, M. & Markworth, K. (2015) Developing a Culture of Learning Around the edTPA: One University's Journey. *The New Educator*, 11, p.37-59.
- Okhremtchouk, I., Seiki, S., Gilliland, B., Ateh, C., Wallace, M., & Kato, A. (2009) Voices of Pre-Service Teachers: Perspectives on the Performance Assessment for California Teachers (PACT). *Issues in Teacher Education*, 18(1) p.39-62.
- 小柳和喜雄 (2015) 教員養成における質保証の取り組みに関する調査報告：米国における edTPA の動きを中心に。奈良教育大学 次世代教員養成センター研究紀要 (1), 261-265.
- 小柳和喜雄 (2016a) 教師の力量の概念に関する理論的動向—諸外国と我が国におけるスタンダードの開発をふまえて—。日本教育工学会監修、木原俊行・寺嶋浩介・島田希編著、教育工学選書 II 10 教育工学的アプローチによる教師教育。20-39.
- 小柳和喜雄 (2016b) 教員養成及び現職研修における「技術と関わる教育的内容知識(TPACK)」の育成プログラムに関する予備的研究。教育メディア研究 23(1), 15-31.
- Pecheone, R. L., Pigg, M. J., Chung, R. R., & Souviney, R. J. (2005). Performance assessment and electronic portfolios: Their effect on teacher learning and education. *The Clearing House*, 78(4), p.164-176.
- Ratner, A. R., & Kolman, J. S. (2016) Breakers, Benders, and Obeyers: Inquiring into Teacher Educators' Mediation of edTPA. *Education Policy Analysis Archives*, 24(35).p.1-26.
- Reagan, E. M., Schram, T., McCurdy, K., Chang, T.-H., & Evans, C. M. (2016) Politics of Policy: Assessing the Implementation, Impact, and Evolution of the Performance Assessment for California Teachers (PACT) and edTPA. *Education Policy Analysis Archives*, 24(9). p.1-24.
- Riggs, M.L., Verdi, M. P. & Arlin, P. K. (2009) A Local Evaluation of the Reliability, Validity, and Procedural Adequacy of the Teacher Performance Assessment Exam for Teaching Credential Candidates. *Issues in Teacher Education* 18(1), p.13-38.
- Sandholtz, J. H. (2012) Predictions and Performance on the PACT Teaching Event: Case Studies of High and Low Performers. *Teacher Education Quarterly*, 39(3), p.103-126.
- Sandholtz, J. H. & Shea, L.M. (2015) Examining the Extremes: High and Low Performance on a Teaching Performance Assessment for Licensure. *Teacher Education Quarterly*, 42(2), p.17-42.
- Schulman, L.S. (1986) Those who understand: knowledge growth in teaching. *Educational Researcher*, 15:4-14.
- Schulman, L.S. (1987) Knowledge and teaching: foundations of the new reform. *Harvard Educational Review*, 57, p.1-22.
- Schulman, L.S. (2005) Signature pedagogies in the professions. *Daedalus* 134(3), p.52-59
- Stillman, J., Anderson, L., Arellano, A., Wong, P. L., Berta-Avila, M., Alfaro, C., & Struthers, K. (2013) Putting PACT in Context and Context in PACT: Teacher Educators Collaborating around Program-Specific and Shared Learning Goals. *Teacher Education Quarterly*, 40(4) p.135-157.
- Torgerson, C. W., Macy, S.R., Beare, P., & Tanner, D.E. (2009) Fresno Assessment of Student Teachers: A Teacher Performance Assessment that Informs Practice. *Issues in Teacher Education*, 18(1) p.63-82.
- van Es, E. A. & Conroy, J. (2009) Using the Performance Assessment for California Teachers to Examine Pre-Service Teachers' Conceptions of Teaching Mathematics for Understanding. *Issues in Teacher Education*, 18(1) p.83-102.